
舐(る)子は、あの

ボーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舐子は、あの

【Zコード】

N41340

【作者名】

ボーン

【あらすじ】

約三十日降り続いた雨は災害を引き起しつゝし、死傷者及び行方不明者多数の状況をつくり出している。

家庭教師のアルバイトをしている山口とその先輩である西富は、この状況でも変わらず行われる講習会に参加する為に、待ち合わせをしていました。

(前書き)

題名は勿論アナグラムです。

事情により、以前書いた「流れ落ちる先（上）」に手を加えてこの形になりました。

前文の「流れ落ちる先（上）」を読んでくださった方、有難うございます。そして、申し訳ありませんでした。

雨の日に原付で移動することほど馬鹿らしくはない。
まして半ヘルだったならなおさらだ。

地下駐輪場に愛車を止めた祐一は、濡れた靴で滑りやすい階段をゆっくりと登っていた。数メートル先にある地上出口に見える空は鉛色で、倦んだ気配が広がっていた。雨は、もう一ヶ月も降り続いている。

「これはどういふの？」

最近よく浮かんでくる問いを、もう一度繰り返す。

山口祐一の記憶が正しければ、「これは日本で、もっと言えば住み慣れた仙台で間違いないはずだた。

夏が終わると同時に早足で秋が駆け抜け、冷たく澄んだ空と硬質な星の光が冬の訪れを告げる。そういう時期にあるのが通常の姿なのだ。

「山口君。おひさしふり。」

「待たせちゃってすいません、西園さん。」

地上出口はアーケードにの中心へと繋がっている。階段を登つけるとすぐに、人ごみの中から山口へとかけられる声があった。西宮怜は、去年始めた家庭教師のアルバイトでの先輩にあたる。仕事内容の説明会でほんの少し言葉を交わしただけの彼女とは、実に一年ぶりの再会になる。

「わざわざここまで出てくれるの、大変だったでしょ。山口君て実家若林区って言つてたわよね。」

「いや、あの後引越して一人暮らしになつたんで、特に問題はないんですよ。でも、雨つてのはめんぢくさいですね。」

「ああ、原付だもんね。車持つてなかつたらそつなるかあ。」

「なんでこんな日に講習なんてするんですかね。」

「つて言つたつて、何時降り止むかもわからないけどね。」

降り続いた雨は、ダムを溢れさせ、作物を洗い流し、山の斜面を切り崩している。氾濫した川に流された人間は、もう何人になるかもわからない。

だが不思議、というか奇妙なのは、世の中にそれほどの危機感がないことだった。それどころか、心のどこかでわくわくしているようにも思えるのだった。歩道の排水路が限界を迎えて一センチの泥水が路上を覆つても、その上を歩く人々は雲の上でも歩くようなふわふわとした足取りだった。

「あ、そっちじゃないわよ。こっち曲がつた方が近道だから。」

考え方をしていれば、背中から声がかかつた。彼女が立ち止まつたのに気付かず通り過ぎてしまつたらしい。

「すいません」

「別にいいのよ。なにか心配事でもあるのかしら」

こんな非常事態なのに、ないなんてことは無いんぢやないでしちうか。

言つても許されそうな台詞ではあるが、出口は口に出すことはしなかつた。心配事にカテゴライズされるのには適さない気持ちだ。

「いえ、なんでもないです」

「それならいいのだけど」

深く追求する」とも無くアッサリと引いてみせた西富は、じやあ急
ぎあしょりと声をかけ、足を早めた。

「…………でもこんなときでも説明会つて。商売熱心だかそう
じやないんだかわかりませんね。明日の仕事を脅かされるような非
常事態にあって、気にするところが間違ってる気がします。もつと
別のことを心配したほうがいいんじゃないですかね。」

「けつこいつ、わね山口君。でも、そういうあなたは何か建設的
な心配をしていると言えるのかしら」
「いや、それは、ない、ですか？」

吉葉尻をヒラヒラ返せば、西富はふつと笑った。

「かくいう私も、ないんだけどね。」

「へえ、そうなんですか。意外です。西富さん、そういうの考える
の好きそつだなって思つてしましました。」

「気分じゃないのよ」

「ううん、語弊があるかしら。

人ごみを抜ける内に多少乱れた長い黒髪を、耳に掛けなおす。

「やっぱ風に、思考が操作されてるって感じかな。」

きよとん、とした顔をしてしまったのかもしれない。
言ひ終えて山口に向き直った西富は、ブツと笑った。

「なあに、その顔。ちょっと面白くじやない。そんな可憐い顔もで
きたのね。」

「いや、なんかあまりに意外なことを言われたんで、その。」

彼女に似合わない、子供がいいそうなたわ言だと思った。

「いや、別に駄目ってわけじゃないんですけど。」

「いえ、さっきの山口君、明らかに変な人を見る目になつてたわよ。」

「

一瞬だけ可愛かつたのに勿体ない。そう言われた。若干照れて、山口は俯いた。

「西面さんずるいですよ。からかつたんですか、もう。」

「別にそういうわけじゃないんだけどねえ。」

「だつてそんな突飛なこと。」

「あ、やっぱり思つてたんじゃない。山口君は誤魔化して。」

雨は未だに降り続いている。が、アーケードの下では、屋根にあたる水滴の硬い音が響くだけだ。

リズミカルとは程遠い乱暴な音を耳に入れながら、山口は確信していた。

彼の心に期待が溢れているのは、誤魔化しそうもない事実だった。そして、ひとつ、思い立った。

「西面さん。」

「なにかしら。」

急に声の調子を変えた山口に、彼女は戸惑つたように見える。

「今日の講習、どんな内容だか知りますか。」

「ええ。貴方も知ってる通り、指導方法についての内容が中心となつてるわ。いつも通りね。」

「人の命がかかってる状況だったら、後回にされる程度のものですね。」

「…………」

なにが言いたいの、と田で訴えてみせる西富は、二つの間にか足を止めて山口に相対していた。

「さつき、地下駐からあがるとకに、みずたまりに足を取られて滑つて転んだお婆さんがいた」

「ええっ。なんでもっと早く言わないのよ。」

「 ような、いなかつたような。あれ、記憶がはっきりしないんですけど何ですかね。誰かに操作でもされたかな。」

そのよつて言えば、西富は、さりに眉を寄せた。

「ちょっと確認しに戻りませんか。でもこの道勾配がちょっと危険なので、今度は遠回りで。」

「要するに、私に話したい」ともあるのかしりへ。」

まっすぐ向けられた視線は、容赦なしに出口の田を貫いた。そして、解かれた。

「馬鹿なこと言つてる暇があったら、行くわよ。」

「どこにですか。」

「お婆さんが大変なんですよ。あ、でも私はピンヒールできたから疲れちゃった。滑るし、坂はもう嫌だわ。」

西富は、片足あげて誇示するよつてふりふりと振つて見せた。

「遠回りって、どう行けばいいのかしら。いい道を頼むわよ。」

喫茶店にて一組の男女が対面している。女性は長い黒髪をまっすぐ垂らし、ピンヒールのかかとで床をコツコツと叩いていた。一方の男性は、まだどこか幼さの名残が見えるようなくなりとした瞳をした青年だつたが、慣れた様子でスーツを着こなし、リラックスした様子で椅子に腰掛けていた。

「さて、私に話ってなんなかしら、山口君。」

「さつき西園さんが言つたことが面白かったので。」

樂にしてこるように見えても實際は緊張しているのか、男の声は若干の緊張を孕んでいた。

「一体なんのことと言つてるのかしら。あなたの口からはつきり聞きたいわ。」

「いじめないでくださいよ。わかつてらうしゃるんでしょう。」

男性のすがるような声音は女性に何の変化も及ぼさなかつた。仕方なしに青年は言葉を続ける。

「もう一ヶ月、雨が降り続いてます。その影響で多くの人がなくなつて、生きている人間にも生命の危機が降りかかっています。」

「そうね。それが？」

「でも、自分も含めて誰も、危機感を持つていません。正確に

言えば実感していないといふべきか、それとも別の感情と置き換えられてると云ひべきか。」

「ふうん。その、別の感情ってなんなのかしら。」

「俺の感覚だとそれは、期待と興奮ですね。」

「へえ。」

西富は相槌を打つが、その声には未だ特別な感情は見られなかつた。だが、床を叩くかかとのリズムが上がつてゐる。彼女の反応を引き出すにはもう少しだ。

山口は核心に入った。

「思考操作」

言い切ると山口は、言葉の意味を強調するように十分な間をとつてから続けた。

「やつこつひつて、この現代日本において考えられるものなんですか。SFとかだと普段摂取する食物に服従剤が入れられていて、何も疑問に思わなくなるとかありますけど。」

「なるほど。私が言った操作つて言葉からそこまで発展させて考えたわけね。西つてSFとかそういうの好きやつ。」

「いや、好きですけど……。別にそんなことどうでもいいじゃないですか。」

「まあ、そりやそつね。じゃあ話をもじすけど、私達にそつ思わせることで一体誰が得するつていつのかしら。」

「ええと、それはですね」

山口は押し黙つた。考へても該当者がいない、わけではない。そのことを考へようとする頭の隅が霧がかつたよつておぼろげとなり、まともに思考できないこと気がついたためだつた。

「わからないです。といつよつは、わからないつていう結果が出るまで考へる」ことが出来ません。」

「それはいつから?」「

「いつからって言われても、今の今まで気にしたことなかつたし、わからないですよ。」

「でしょうね。」

西富は小さく呟くと優雅に足を組み替えた。

「ちよひと山口君の鞄、貸してられない。」

さて、と当たり前のよひに言い放つ西富は、山口は狼狽した。

「えつ。なんていきなり。」

「大丈夫、漁つたりはしないから。ほら、早く。」

「ええつ。……まあいいんですけど。」

机越しに黒い鞄を受け取ると、西富は山口の鞄に手を突っ込んだ。驚いて留めようとする山口を田で制して、西富は言った。

「今私は何を出やうとしているでしょつか。」

「漁らないつていったのに結局漁るんですか。出でくるのなんてノートか筆記用具か iPodか財布かそんなもんしかないですよ。よく考えた結果がそれなの?」

「当たり前じやないですか。」

とは言いつつも、真剣に考えたとは言つてゐるので、山口はきちんと思考し直した。先ほどのときのようなもやがかった感じではなく、クリアに思考できる。だが、結果は変わらない。引っ張りだすつも

りならばそこには入っていたものがあるはずなのだ。
正解は、そう言って西宮は鞄に入れた手を上に引いた。

「兎でした。」

「ええつ。」

西宮の手には確かに立体に満ち満ちたもじもじとした毛並みの兎が
治まっていた。

「私達の思考が及ぶ範囲なら、現実はいくらでも作り出せるみたい
よ、結構前から。でも他人の思考には干渉できない。そういうふう
にできているみたい。この兩も、そのなのかもよ。だから、山口君
の言つてることって、見当違ひね。」

「すいません。理解力に乏しくて、何を言われているかわからない
のですが。」

つまんないことよ、と言しながら、彼女は机に置いた兎の背中を優
しくなでた。

「私達一人ひとりが神様、つてことよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4134o/>

舐(る)子は、あの

2010年10月20日23時40分発行